加盟チーム各位　　2007/7/14

２ブロック
運営委員会

サッカー競技の精神

競技規則、相手競技者、審判を尊重することによってのみ、サッカー競技がフェアプレーの精神にのっとって競技される

はじめに

サッカー競技の精神は、少年育成に係る私達指導者が最も指導の全面に表さなくては成らない事ではないでしょうか。少年期にフェアプレーの精神を養っておけば社会で充分生かされるものと信じています。この所、プロサッカー選手が発生させた不祥事が社会問題にまで発展しています、この様な事態は少年期にフェアプレーを学んでいなかったことが原因ではないでしょうか。

「プロフェッショナルファール」反則することで相手のチャンスを奪う行為、試合の解説で良く聴かされました。技術が無いから反則で相手のプレーを阻止する、自分はへたくそな選手と自己評価しているようなものです。「どんな方法でも勝てば結果オーライ？」この様な間違ったサッカーを子供達が覚えては大変な事になります。

どの様な状況にあっても相手があって競技が出来る、お互いが安全にプレーする為に規則が存在する、試合を公正に行なう為にお互いのチームが中立な立場の第三者に審判を依頼する。これで試合の準備が出来ました、がしかし開始早々、ファールの連続、規則の裏をついた違反行為、更にそれを注意した審判に異議を示す。この様な選手に成って欲しくは無いと指導者なら誰もが思うのではないでしょうか。

サッカー競技の精神は、子供達だけを対象にしているのではありません、指導者、審判、父母も含め全体で取組んでいかなくてはならないものです。指導者や父母の声で選手のプレーに少なからず影響が出ていることは周知の事と思います。競技の中での指示はチームの１人の指導者にのみ許されています。　四方八方から技術的な指示やネガティブなコーチングがあっては子供達の成果の検証は何処で行うのでしょうか、独りよがりの満足で育成を成功させる事は出来ません。

1 人制審判実施に向けて

少年サッカーでは指導者が審判にもなります、どうしても結果を重視するあまり指導に重点が置かれ審判員としての勉強不足が目立ちます。今回、審判員の技術向上と全権を委ねられている責任とフェアプレーの精神を養う為に（1 人制審判）を採用する事と致しました。国際的には既に各国で行なわれています、当ブロックでは今年度のフェアプレーカップの最終日で採用し良い結果を表しています。試合開始前に子供達、指導者、父母を対象に趣旨を説明したことで 4 試合とも素晴らしいフェアプレーが展開されました。試合終了後、残念ながら代表を逃してしまった選手達と話をした中で一人の選手が「あのシュートは入っていた」と残念な気持ちを伝えてきました、がしかしチームメイト達が一斉に「フェアプレーだぞ！」の声でその選手も直ぐに気付いてくれました。こんな素直な子供達の心に反する様な父母がいました、試合に遅れてきて声高らかに騒いでいましたが、フェアプレーを理解している父母に制止されていたのが印象に残りました。

1、　　８人制サッカーの競技規則　（審判１人制）

※〔規則は 11 人制に準じています〕

競技規則の基本的考え方　　〔　波線は注釈と 2B 内規　〕

① 審判 1 人制を採用する事により、選手のフェアプレー精神を養う。
② 審判員を信頼し、判定に対して不平不満を表さない。
③ 審判員の決定に従いつつ、ラインアウトについてはプレーヤーから申告する
　フェアな姿勢を養う。
④ 指導者や保護者など、大人のフェアプレー精神も養う。

審判員の試合運営上の留意点（共通理解）

① 1 人制であることから、よく動き、よい位置取りを心がけて説得力ある判定を
　目指す。
② オフサイドの判定については、主審の見解で明確な場合のみを罰し、原則的に
　「疑わしきは罰せず」の考え方をとる。
③ スローインについては、ファールスローなどの違反を探すのではなく、明らかな
　場合のみを罰し、指導も行う（指導とは口頭で伝えるもので、実技を行うものではない）
④ フェアプレーの精神、良いマナーを養う目的から判定に対してや他の人に対して
　の言動にも注意を払い、指導をしていく。

競技規則

競技規則について：8 人制の主旨を徹底させるためにのみ必要な変更を行う

第1条　　**競技のフィールド**

① 全日本少年サッカー大会に準じる。ただし、フィールドの大きさは、
　通常のフィールドの半分の大きさを推奨する。
② マークなどの長さ、ゴールの大きさは次のとおり
　・ ペナルティーエリアの縦　：12m
　・ ペナルティーマーク　　：8m
　・ ペナルティーアークの半径：7m
　・ ゴールエリアの縦　　：4m
　・ センターサークルの半径　：7m
　・ ゴールの大きさ　　：5m×2m　＊(通常の少年用)

第２条　**ボール**

①　少年用の４号第 3 条　**競技者の数**
① 8 人(内１人はゴールキーパー)とする。
② 交代要員の数は競技会規定で定める。
（２ブロックの選手登録はスターティングリストに 20 名。その他、固有の
　選手番号を付けている、全員をベンチの横及び後方に入れることが出来る)
③ 交代は「自由な交代」とする。

第４条　競技者の用具

① 変更なし。

第５条　主審

① 主審 1 人制とする。

※グリーンカード制度が導入されている大会においては、主審はグリーンカードを示すことができる。

② 予備審判員 1 名を指名する。

・ 記録、交代管理、3 分間計時（一時退場・退席）採用しません。

・ 主審負傷の場合交替可

第６条　副審

① 副審を配置しない。

第７条　試合時間

① 競技会規定により定める（ピリオド制も可とする）

※目安は 10 分～15 分ハーフ、ハーフタイムのインターバル 5 分

② 延長は 3 分ハーフ（V ゴールなし）

③ PK 方式は 3 人ずつ

第 8 条～第 11 条　**変更なし**

第 12 条　**反則と不正行為**

① 退場（R）は退場処分に加えて相手チームに PK を与える(インプレー、アウトオブプレーに係らず）採用しません。

・ 退場の場合、当該チームは交代要員の中から競技者を補充する。
再開は PK の結果による(キックオフ、GC、CK、プレー続行)

・ 試合途中、怪我などの理由で 7 人以下となった場合、その試合は続行するが次の試合は、参考試合とする。

【ベンチ役員の退席】

・ ベンチからのコーチングは監督のみ可とする。

・ ベンチにいる役員(監督、コーチ、スタッフ等)が判定に対して異議を唱えたり、選手に対して罵声などネガティブなコーチングを行ない、主審から一度注意を受けた後、再度何れかの役員が同様な行為をした場合は、主審の判断によりその役員を退席処分とし、それ以降のベンチからのコーチングは、不可とする。

第 13 条　フリーキック

① 相手競技者は 7m 以上ボールから離れる。

第 14 条～第 16 条　変更なし

第１７条　コーナーキック

① ボールがインプレーになるまで相手選手は 7m 離れる。

＜グリーンカード制度について＞

グリーカード制度を導入する大会(試合)においては、別紙『グリーンカード制度の積極的導入に関して』を参照の上、運用すること。

2　グリーンカード制度の積極的導入に関して

はじめに

サッカーは人生の学校です。この素晴らしいゲームは、楽しいばかりではなく、感情を呼び起こすものです。負けた時には悲しみと涙、勝ったときには歓びと祝祭。

サッカーは教師です。サッカーは少年少女に人生の徳と価値を学ぶ機会を与えます。

- チームとして共に努力する
- フィールド上で互いに助け合う
- 常にフェアプレーを示すこと
- 良いスポーツマンシップを示すこと
- 怪我をした者を助け共感を示すこと
- 敗者も勝者も称えること
- 対戦相手、チームオフィシャル、レフェリーに敬意を払うこと

これらの価値感は全て家庭や共同体のメンバーの中での日常の生活にもあてはまるものです。サッカーはプレーヤーの身体面、社会面、心理面の要素の発達を助けます。

ゲーム

世界中で毎日ひっきりなしに、無数の試合がプレーされています。その大多数は楽しみのためのものです。レフェリーは、試合のルールの守り手です。レフェリーは、ルールが尊重され全員がゲームを楽しめるようにします。

イエローカード、レッドカード

これまでレフェリーは、イエローカードとレッドカードを使って、その行為がルールに違反しているということをプレーヤーに伝えることをやくわりとして与えられていました。これらのカードは、ある特定のネガティブなアクションがフェアではなく、許されないということ、を説明するために示されるものである。レフェリーはそれらを示し、フィールド上で 22 名のプレーヤー全員に対しフェアとなるようにしなくてはなりません。

ポジティブな教育

子供達がサッカーを始めたときから、我々は彼等にスキルを教えるとともに、
「してはいけないこと」も教えます。時として、トレーニングや試合でしてはいけないことの方に注意が払われることが見受けられますが、彼らがポジティブなことをしたら賞賛や感謝をすべきです。

これが、グリーンカードの背景にある考え方です。グリーンカードの意味は以下の通です。

- それは良いアクションである。その調子で続けなさい。
- ポジティブなアクションを再認識・再強化する。
- ポジティブな教育である。
- 認め、感謝し、もっとやるように励ます。
- 他の人が見本とすべき手本である。
- ファンやオフィシャルもあなたのアクションを認め評価している。

グリーンカードはどのようなときに提示するのか

レフェリーは、グリーンカードを示すのに、プレーを止める必要はありません。
ボールがプレーエリアから出たら、あるいはその他の理由でプレーが止まったら、
すぐにカードを出せば良いのです。レフェリーは、プレーヤーのポジティブな行為を
認めるしるしとしてポジティブなジェスチャーを示すことが奨励されます。

以下は、グリーンカードを出す状況の例です。

- 怪我をした選手への思いやり
- 意図していないファウルプレーの際の謝罪や握手
- 自己申告（ボールが境界線を出たとき：スローイン、CK、GK、ゴール）
- 問題となる行動を起こしそうな味方選手を制止する行為
- チーム(オフィシャルを含む)が試合全体を通し、警告も退場も受けず、ポジティブな態度を示す。(レフェリーは試合終了の笛を吹く際に、チームベンチに向かってカードを提示する）

終わりに

子供達は指導者に教えて頂いた成果を求め真剣にプレーに立向かう、指導者は指導の経過を検証する為に最小限度の指示に留める、父母はサッカーの試合を通じ子供の成長を見守る。
テレビは番組の「はじめてのお使い」と言う番組があります。文字通り幼児が母親に頼まれたお使いに行く、家を出て→お使いをし→家に帰るまでを、テレビ局のスタッフが周りをガードし成功させる番組です。この番組を私達の少年サッカーに置き換えた場合、テレビ局のスタッフは指導者、母親はスタッフを信頼し家で見守っています。道路など危険な場所では気付かれないように方向修正し安全にお使いを成功させようと真剣に取組んでいます。子供が考え自分の意志で行動する、危険でない限り見守ることが育成には最も大切な事ではないでしょうか。
我慢した数だけ良い成果が期待できると信じています。

【文責　委員長　森進】